

卒都婆小町

古名

小町物狂

觀阿弥作

ワキ
高野山の僧
ワキヅレ 同伴僧
シテ 小野小町
季は 地は 山城

「山は浅きに隠れがの。く。深きや心なるらん。

詞「これは高野山より出でたる僧にて候。我このたび

都にのぼらばやと思ひ候。

サシ「それ前仏は既に去り。後仏はいまだ世に出でず。

ワキ、ツレ「夢の中間に生れ来て。何を現と思ふべき。たまく受け難き人身を受け。逢ひ難き如来の仏教に逢ひ奉る事。これぞ悟りの種なると。

下歌「思ふ心もひとへなる。墨の衣に身をなして。

上歌「生れぬさきの身を知れば。く。憐むべき親もなし。親のなれば我ために。心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず。野に臥し山に泊る身の。これぞ誠のすみかなる。く。

シテ次第「身は浮草をさそふ水。く。なきこそ悲しかりけれ。

サシ「あはれやげにいにしへ。驕慢もつとも甚しう。

翡翠のかんざしは婀娜とたをやかにして。楊柳の

春の風になびくが如し。また鶯舌の囀りは。露を含める糸萩の。かごとばかりに散りそむる。花よりもなほめづらしや。今は民間賤の女にさへ穢なまれ。諸人に恥をさらし。うれしからぬ月日身に積つて。百年の姥と為りて候。

下歌
「都は人目つゝましや。もしもそれとか夕まぐれ。

上歌
「月もろともに出でゝ行く。く。雲井百敷や。大内山の山守も。かゝる憂き身はよも咎めじ。木が

くれてよしなや。鳥羽の恋塚秋の山。月の桂の河瀬舟。漕ぎゆく人は誰やらん。く。

シテ詞
「あまりに苦しう候ふほどに。これなる朽木に腰を懸けて休まばやと思ひ候。

ワキ詞
「なふはや日の暮れて候ふ道を急がうするにて候。や。これなる乞食の腰かけたるは。正しく卒都婆にて候。教化してのけうするにて候。いかにこれなる乞丐人。お事の腰かけたるは。かたじけなく

も仮体色性の卒都婆にては無きか。そこ立ちのきて余の所に休み候へ。

シテ「仮体色性のかたじけなきとは宣へども。是ほどに文字も見えず。刻める像もなし。たゞ朽木とこそ見えたれ。

ワキ「たとひ深山の朽木なりとも。花咲きし木はかくれもなし。いはんや仮体に刻める木。などかしるしのなかるべき。

シテ「我も賤しき埋木なれども。心の花のまだ有れば。手向になどかならざらん。さて仮体たるべき謂は如何に。

ワキツレ「それ卒都婆は金剛薩埵。かりに出仮して三摩耶形を行ひ給ふ。

シテ「行ひなせる形は如何に。

ワキ「地水火風空。

シテ「五体五輪は人の体。何しに隔あるべきぞ。

ワキ、ツレ 「形はそれに違はずとも。心功德はかはるべし。

シテ 「さて卒都婆の功德は如何に。

ワキ 「見卒都婆永離三悪道。

シテ 「念发起菩提心。それも如何でか劣るべき。

ツレ 「菩提心あらばなど浮世をば厭はぬぞ。

シテ 「姿が世をも厭はゞこそ。心こそ厭へ。

ワキ 「心なき身なればこそ。仏体をば知らざるらめ。

シテ 「仏体と知ればこそ卒都婆には近づきたれ。

ツレ 「さらばなど礼をば為さで敷きたるぞ。

シテ 「とても臥したる此卒都婆。我も休むは苦しいか。

ワキ 「それは順縁にはづれたり。

ツレ 「逆縁なりと浮ぶべし。

ツレ 「提婆が悪も。

シテ 「觀音の慈悲。

ワキ 「槃特が愚痴も。

シテ 「文珠の智恵。

ツレ 「悪と云ふも。

シテ 「善なり。

ワキ 「煩惱といふも。

シテ 「菩提なり。

ツレ 「菩提もと。

シテ 「植木にあらず。

ワキ 「明鏡また。

シテ 「台に無し。

地 「げに本来一物なき時は。仏も衆生も隔なし。もと
より愚痴の凡夫を。救はん為めの方便の。深き誓
ひの願なれば。逆縁なりと浮ぶべしと。ねんごろ
に申せば。誠に悟れる非人なりとて。僧は頭を地
につけて。三度礼し給へば。

シテ 「我は此時力を得。なほ戯れの歌をよむ。極楽の内
ならばこそ悪しからぬ。外は何かは苦しかるべき。
地 「むつかしの僧の教化や。く。

ワキ詞

「さて御事は如何なる人ぞ名を御名のり候へ。

シテ詞

「はづかしながら名を名のり候ふべし。これは出羽の郡司小野の良実がむすめ。小野の小町が為れる果にてさぶらふなり。

ワキ、ツレ
「いたはしやな小町は。さもいにしへは優女にて。
花のかたちかゝやき。桂の黛青うして。白粉を絶えさず。羅綾の衣多うして。桂殿の間に余りしづかし。

シテ
「歌をよみ詩を作り。

地
「醉をすゝむる盃は。漢月袖に静なり。まこと優なる有様の。いつ其ほどに引きかへて。頭には霜蓬をいたゞき。嬢妍たりし両鬢も。膚にかしけて墨みだれ。艶々たりし双蛾も。遠山の色を失ふ。百年に一年足らぬつても髪。斯かる思ひは有明の。百影はづかしき我身かな。

ロンギ地

「首に懸けたる袋には。如何なる物を入れたるぞ。

シテ
「今日も命は知らねども。明日の飢ゑを助けんと。

粟豆の餉を。袋に入れて持ちたるよ。

地
「うしろに負へる袋には。

シテ
「垢膩の垢づける衣あり。

地
「臂にかけたるあじかには。白黒の田烏子あり。

地
「破れ簾。

シテ
「やぶれ笠。

地
「面ばかりも隠さねば。

シテ
「まして霜雪雨露。

地
「なみだをだにも抑ふべき。袂も袖もあらばこそ。

今は路頭にさそらひ。往来の人々に物を乞ふ。乞ひ
得ぬ時は恶心。また狂乱の心つきて。声かはりけ
しからず。

シテ
「なふ物給べなふ御僧なふ。

ワキ詞
「何事ぞ。

シテ
「小町がもとへ通はうよなふ。

シテ詞

ワキ 「おことこそ小町よ。何とて現なき事をば申すぞ。

シテ 「いや小町といふ人は。あまりに色が深うて。あなた

の玉章こなたの文。かきくれて降る五月雨の。

空言なりとも一度の返事もなうて。いま百年に為るが報うて。あら人恋しや。あら人こひしや。

ワキ 「人こひしいとは。さてお事には如何なる者のつきそひてあるぞ。

シテ 「小町に心を懸けし人は多き中にも。殊に思ひ深草

の四位の少将の。

地 「恨みの数のめぐり来て。車のしどに通はん。日は何時ぞ夕暮。月こそ友よ通路の。関守はありとも。留まるまじや出で立たん。

シテ 「淨衣の袴かいとつて。

地 「淨衣の袴かいとつて。立烏帽子を風折り。狩衣の袖をうちかづいて。人目しのぶの通路の。月にも行く暗にも行く。雨の夜も風の夜も。木の葉の時

雨雪ふかし。

シテ
「軒の玉水とくくと。

地
「行きてはかへりくへては行き。一夜二夜三夜四夜。
七夜八夜九夜。豊の明の節会にも。逢はでぞかよ
ふ庭鳥の。時をもかへず暁の。榻のはしがき。百
夜までと通ひるて。九十九夜になりたり。

シテ
「あら苦し目まひや。

地
「胸くるしやと悲しみて。一夜を待たで死したりし。

深草の少将の。その怨念が附き添ひて。かやうに
物には狂はするぞや。

地
「これにつけても後の世を。願ふぞ誠なりける。砂
を塔と重ねて。黄金の膚こまやかに。花を仏に手
向けつゝ。悟りの道に入らうよ。く。